

## 平成 29 年度霞ヶ浦学講座 第 15 講 実施報告

実施日時：平成 30 年 3 月 18 日（日）13:30－15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：沼澤篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：43 名

**テーマ：霞ヶ浦の歴史 2—近代～現代（水害克服から開発へ、水質悪化から改善へ）**

**要旨：**江戸期後半の霞ヶ浦周辺地方は利根川東遷の影響を受け、水害が頻発しました。農民は洲浚いや水行直しと呼ばれる川普請に動員されました。土浦は霞ヶ浦からの逆流型洪水に悩まされ、長島尉信、色川御蔭らの研究を受けて、明治期には色川三郎兵衛らが洪水対策に奔走しました。一方、高瀬船や蒸気船で東京と結ばれ、米、醤油、日本酒、薪炭などが水運で江戸へ運ばれ、庶民や文人墨客が東国三社詣、水郷観光を楽しみました。その後、鉄道路線開通、道路網や橋梁の整備で、物流の主役は陸運に移りました。沿岸各地では干拓事業が着手されましたが、水害克服が水郷農民の悲願でした。水産業では帆引漁（折本良平発明）が普及し、佃煮製造が盛んになりました。

戦後復興の基礎として、建設省は利根川下流放水路事業（河道分離、拡幅、浚渫、築堤）を本格化し、常陸川は利根本流と分離されました。その推進に、治水の父と呼ばれた須田誠太郎（旧牛堀町長）らが貢献しました。水害は激減しましたが、海拔高度が低い霞ヶ浦に塩水が遡上し、塩害が生じました。建設省は地元の要望を受け、常陸川水門（逆水門）を 1963 年に設置しました。また鹿島臨海工業地帯、筑波研究学園都市建設にともない、安定水資源として期待されました。築堤と水位管理によって水害が無くなり、干拓地を含む沿岸の湿田は土地改良によって乾田化が進み、大型農機が入る優良農地へ変貌しました。また湖水は揚水機場で取水され、農業用水として遠隔地へ送水されています。「霞ヶ浦用水事業」「石岡台地農業水利事業」「鹿島南部農業水利事業」が農業の安定化に寄与しました。首都圏に接するつくば市、牛久市、龍ヶ崎市等では住宅団地が造成され、人口が急増し、その上水道水は霞ヶ浦から供給されています。こうした県南、県西、鹿行地方の発展に、霞ヶ浦開発事業（1996 年概成）が大きく貢献しました。

他方、治水・利水を優先した霞ヶ浦開発の負の側面として、過度の富栄養化、生物多様性低下、湿地・植生帯減少、水産業衰退、遊泳場閉鎖を招きました。富栄養化は閉鎖性水域の宿命ですが、都市化等で土地利用が変化し、生活排水負荷、農畜産業の構造変化、森林減少などの要因が拍車をかけました。水産業では養殖漁業への転換が図られ、鯉網生簀養殖が一時期発展しましたが、度重なる大量斃死を経て規模縮小を余儀なくされました。

近年、地域社会では水質保全や自然再生など、霞ヶ浦の環境改善が大きな課題です。茨城県では霞ヶ浦水質保全条例（旧霞ヶ浦富栄養化防止条例）、国では湖沼水質保全特別措置法（湖沼法）に基づく霞ヶ浦水質保全計画（5 年ごとに更新）を策定し、下水道普及率向上や農業集落排水処理施設、高度合併処理浄化槽設置等の成果を上げています。また第 6 回世界湖沼会議(1995 年)を契機として、茨城県霞ヶ浦環境科学センターを設置し、水質保全研究の推進、環境教育、交流促進、市民活動支援に取り組んでいます。